

報道関係各位

公益財団法人 笹川スポーツ財団

【無料セミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」】**第2回 女子マネと母親の役割の共通項
-女性がスポーツを「ささえる」視点から-****9月13日(水) 19時より開催****関 めぐみ氏(甲南大学文学部社会学科 講師)**

「スポーツ・フォー・エブリワン」を推進する笹川スポーツ財団（東京都港区赤坂 理事長：渡邊 一利 以下、SSF）では、これまで子どものスポーツ活動に対する保護者の関与の実態や意識を明らかにする研究を行い、子どものスポーツ活動において、保護者の負担は母親の負担が大きい構造であることなど、さまざまな課題を明らかにしてきました。

少子化や家族のあり方の多様化が進む今、どのような家庭の子どもでもスポーツを楽しめる環境、周囲のサポート体制が求められます。このたび、有識者を交え、持続可能な子どものスポーツ環境の構築に必要なことは何かを、「ささえる」視点から考えるセミナー『誰が子どものスポーツをささえるのか?』を複数回開催予定でございます。

第2回は、女子マネージャーの研究を行う関 めぐみ氏（甲南大学文学部社会学科 講師）。大学運動部内で活動をささえる〈女子マネ〉と、子どものスポーツ活動をサポートする母親の共通項から、女性がスポーツをささえる現場でどのような課題があるのか。そして、女性がスポーツをささえる環境をどのように変えていく必要があるのかなどについて、お話しいたします。

以下の日程で行いますので、ご参加、ご取材のほど、何卒宜しくお願いいたします。

第2回セミナー概要**〈女子マネ〉と母親の仕事の共通項 -女性がスポーツを「ささえる」視点から-****【日 時】** 2023年9月13日(水) 19:00~20:30(予定)

18:30 開場

【開催形式】 ①会場参加 ②オンライン (Zoom) によるハイブリッド開催**【会 場】** 日本財団ビル 1階 バウールーム (東京都港区赤坂 1-2-2)**【参加費】** 無料**【申 込】** 報道関係の方は、メール (info@ssf.or.jp 宛)、もしくは FAX にて申し込みください。
報道関係以外の方は、SSF 公式サイトからお申し込みください。https://www.ssf.or.jp/dotank/seminar/children_youth2023_02.html**【登壇者】****関 めぐみ氏 (甲南大学文学部社会学科 講師)**

大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程修了。博士 (人間科学)。専門は社会学、ジェンダー／セクシュアリティ論。京都光華女子大学女性キャリア開発研究センター助教を経て、2020年4月より現職。2017年と2023年に日本スポーツとジェンダー学会学会賞 (論文賞) を受賞。主な著書に、『〈女子マネ〉のエスノグラフィー：大学運動部における男同士の絆と性差別』(晃洋書房) など。

コーディネーター 宮本 幸子 (SSF スポーツ政策研究所 政策ディレクター)

SSF「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究」担当者。

第2回無料セミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」参加申込書(FAX)

■お申し込みから開催当日参加までの流れ

- ①下記より、**FAX** もしくはメールにてお申し込みください。
- ②開催当日までに、資料の一部と会議 URL とをお送りいたします。
- ③開催当日は、18:30より会場へお入りください/オンラインの場合は、参加 URL より入室ください

フリガナ	
ご芳名	
貴社名	
部署名	
電話	
E-mail	
参加形式 ※どちらかに ○で囲んでください	<input type="checkbox"/> ① 会場 <input type="checkbox"/> ② オンライン

申込締切:2023年9月12日(火) 12:00

FAX もしくはメールにてお願い致します。

- ① FAX : 03-6229-5340 まで本状をお送りください。
- ② メール : info@ssf.or.jp 宛 タイトル:第2回保護者セミナー取材申込
「氏名」「貴社名」「部署名」「電話番号」「参加方式」をご記載ください



【会場所在地】

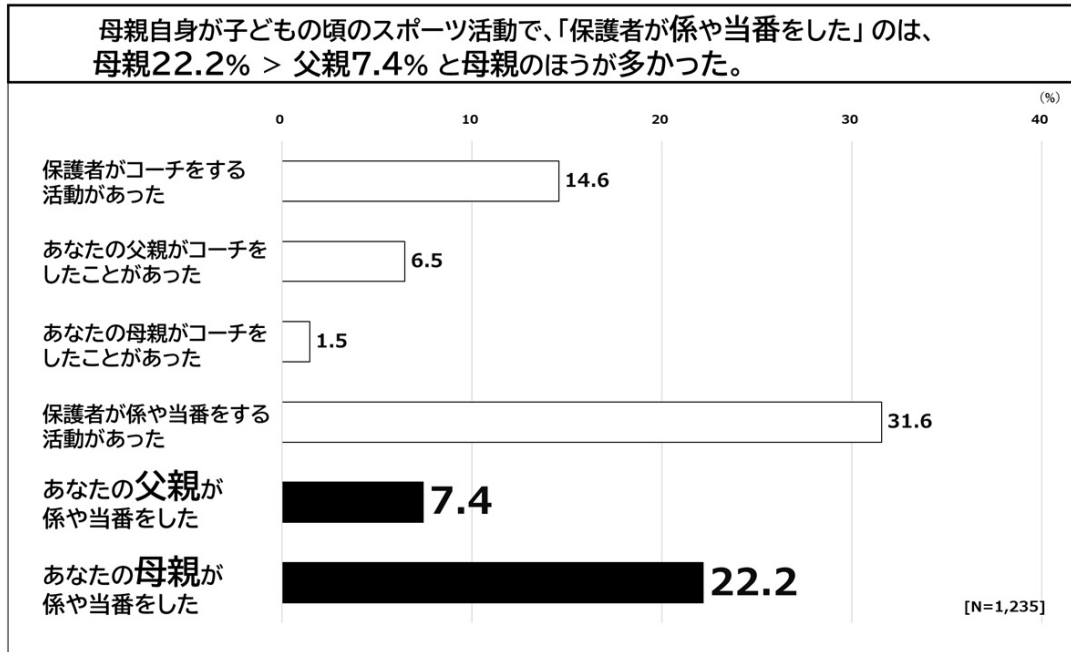
〒107-0052
東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3階
TEL : 03-6229-5300

【会場アクセス】

- ・ 東京メトロ 銀座線「虎ノ門駅」3番もしくは11番出口より徒歩5分
- ・ 東京メトロ 南北線・銀座線「溜池山王駅」9番出口より徒歩5分
- ・ 東京メトロ 丸ノ内線・千代田線「国会議事堂前駅」3番出口より徒歩5分

【参考資料：小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究】
■2022年2月発表「母親自身が子どもの頃から、保護者の役割は母親が中心という構造」

母親自身に子どもの頃、本人やきょうだいスポーツ活動をしていた場合の保護者の関与について尋ねた。「保護者がコーチをする活動」では、「父親がコーチをしたことがあった」6.5%>「母親がコーチをしたことがあった」1.5%と父親のほうが多く、「保護者が係や当番をする活動」では母親22.2%>父親7.4%と母親のほうが多かった。過去の振り返りとして尋ねているため限界はあるものの、子どもたちの祖父母世代から、指導以外の関与は母親が中心であるという構造には変化がない様子が見えてくる。


■2023年1月発表「保護者の当番の“大変なイメージ”が、子どもをスポーツから遠ざける可能性」

当番をめぐる実態を、「当番をしている母親」「当番はしていないが、スポーツ活動をしている母親」「当番を理由にスポーツ活動をしない母親」「その他の理由でスポーツ活動をしない母親」にわけて、全体の分布を示した。対象となる母親全体を母数にすると、現在当番を担当している母親は7.5%にすぎない。しかし、当番の負担を理由にスポーツ活動を敬遠する母親は26.1%にのぼる。

